

国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、15 ページにわたって印刷してあります。
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に H B 又は B の鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、**、や**。**や**「などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の **○** の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 反物（はんぶつ）を買う。
- (2) 内閣（ないかく）が統轄（とうかつか）する。
- (3) 何（なん）の煩（わづら）いもない。
- (4) 万障（ばんしやう）を排する。
- (5) 片言隻語（ぺんげんしやくご）も聞き逃さない。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) フセイシユツの天才作曲家。
- (2) 流行にツウテイする一つの傾向。
- (3) 資金をモトデに店を開く。
- (4) ジョハキユウの変化がある話。
- (5) ウミセンヤマセンの起業家。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

「ぼく」と五歳の息子「ミライ」は公園で遊んだ帰り道、川沿いの湧水池で「ガサガサ（池で魚などを捕まえること）」をしている少年を見かける。近づいて見てみると池にはメダカが泳いでいた。

昼食後、近くの釣具店^{つりぐてん}で安いタモ網^{*}を買った。池の縁に戻り、さっきと同じ場所に立った。ミライの体に比べたら大きすぎる網だが、一緒に持てえいとばかりに水の中に落とす。

引き寄せた青い編み目の中から銀色に光るものが見えた。すーっと直線的な背中^{せなか}のラインで、目は上の方についている。

メダカだった。でっぴり膨らんでいる腹からして、卵を持ったメスに違いなかった。

「うおーっ。」とミライが跳びはねる。

へえ、結構、生き物に興味津々^{しんしん}なのか。

⁽¹⁾ 目を輝かせるさまを見て、ぼくは少し反省した。自分が子どもの頃は、家の前の野原で捕虫網を振り回し、川でザリガニ釣りをする日々だったのに、仕事の忙しさにかまけて、息子の興味を刺激してやることを怠ってきた気がする。

家から持ってきたペットボトルに水を半分くらい満たし、メダカを入れてみる。さっそく水面近くをつーつーと泳いで、楽しげだ。

「とうちゃん、もつとりりたいぞー。」とミライが言い、「じゃあ、一緒にやろう。」と網をふるうち、気がついたらぼくもミライも靴のまま池の中にいた。⁽²⁾ 大人げなく夢中になってしまったわけだけど、それだけのことはあった。こんな小さな池になぜ、と思うほど、生き物が豊かなのだ。数が多い、というより、種類が多い。ちよつと専門的な言葉で

言う「多様性が高い」ということ。

上層や中層は魚の領分で、メダカのはかにフナやタナゴやモロコが毎回のように網に入ってきた。密に生えている水草ごと掬^{すく}うと、大量のスジエビが採れ、時にはゲンゴロウやミズカマキリのような水棲昆虫^{すいせい}が見つかった。さらに池の底をさらえば、小型のシマドジョウ、カマツカ、そして、トンボのヤゴなどが泥^{どろ}の中で蠢^{うごめ}いていた。

「ザリガニがいらないぞー。」とミライは不満げだったが、このあたりの池でザリガニがいらないなんて逆にすごいことで、「いいか、ザリガニってのはもともと日本の生き物じゃないんだ。すごく強いからほかの生き物を食べちゃうんだぞ。ザリガニがいたら、ヤゴなんかいなくなっちゃうぞ。」と言って、納得させた。

「じゃあ、エビでもいいぞ。エビ、たくさんとるぞー。」とミライは言い、途中からは自分だけで網をふるった。最初は振り回されているみたかったけれど、短く持てば安定することを教えるとすぐにコツを掴^{つか}んだ。

水草の付近で震わせるように網を使うやり方がなかなか堂に入っている。一掬いごとに何匹かエビが入っていて、そのたびに歓声をあげた。

ミライの明るい声が、温かな光になってぼくを満たす。ぼく自身、相手が昆虫であれ、水の生き物であれ、こんなふうに網をふるう少年だったし、家にはいつもなにがしかの生き物がいて賑^{にぎ}やかだったつけ。カブトムシ、クワガタ、ザリガニ、タナゴやフナなどの魚……。

「とうちゃん、こういうところにはいるのか。」とミライ。

「なにが？」我に返ったぼくは聞き返した。

「さっき、みたぞ、カメみたいなやつ。」

「あ、カメか……。」

⁽³⁾ ぼくは甘酸っぱい^{あま}気分がさらにあふれ出してきて戸惑った。これも昔のことだが、すぐ近くの池にクサガメがいて、見つけるたびに持ち帰っ

ては、たーちゃんに叱られた。一度、無理を言って、家で飼わせてもらったことがある。でも、その時はすぐに自力で水槽から脱出して行方不明になってしまった。そいつを次に見たのは、半年後、春先の庭に花を植えるために土を掘り起こしていた時だ。クサガメは、なんと、庭で冬眠していたのだ。

「でも、さすがにここにはいないだろ。池が小さすぎる。」

などと言いつつあたりを見渡した。すると、少し先の草地に横たわっている明るい褐色の物体が目飛び込んできた。それはドーム状をしていて、表面には黒い幾何学模様があった。

凝視するうちに、ドームの下から、ぬーっと顔があらわれた。

ぼくは目を疑った。そいつはリクガメなのだ。

距離があるからよくわからないが、とにかく日本にいるものではなくて、マダガスカルとかインドに棲息しているようなやつ。ペットとして輸入されたものが、逃げ出してきたのかもしれない。

でも、そんなことどうでもいい。ぼくは鼓動が次第に高まってくるのを自覚する。

こんな場所で、希少な野生種のリクガメに出会うなんて！

近くの池のカメに夢中になっていた頃、やはり、図鑑でリクガメを見て心惹かれた。つややかな甲羅がまるで宝石みたいで、いつか、飼ってみたいと夢見ていた。

息を詰めるうちに、そいつはのっそのつと足を動かし背を向けた。そのまま歩き出して、少しずつ遠ざかる。ぼくは水の中で足を一步、踏み出した。捕まえない、と本気で思った。

ふいに白い影がよぎった。

後ろ姿の少年が、ひょいとリクガメを抱き上げて去っていく。

あの子のものなのか。追いかけていつて見せてもらおうかと逡巡する。
*しゅんじゅん

「とうちゃん！」とミライが袖を引っぱり、我に返った。

「カメだ、とうちゃんのすきなカメだぞ！」

興奮、というか、驚きにみちた声。

そんなのわかってると言い返そうと思ってミライを見ると、またもドキッと心臓が強く脈打った。⁽⁴⁾

ミライのタモ網の中で、甲羅の長さが十センチほどの小さなカメが腹を向けて足をばたつかせていた。

「とうちゃん、これ、かいたいぞー。」

ぼくは暴れるカメを手にとった。今、日本では一番メジャーなアカミミガメ（ミドリガメの成体）ではなく、本来日本にいる種類だとわかった。

「クサガメだ。最近はなかなか見られないっていうけど、こんなところにもいたんだな。これはだめ。持って帰らない。」

「どうしてだ、とうちゃん。」

「そんなにたくさんいるやつじゃないんだ。エビやフナとは違う。ここにちゃんといてもらおう。」

さっきのリクガメはもともと海外から持ち込まれたものだから、人のものじゃなければ保護してもオーケー。でも、日本の生き物で数が減っているものはだめ、という自分なりの理屈だ。こじつけといえなくもない。

「えー、そうかい、なら、しかたないのかあ。」ミライは一人であだこうだ言いつつ、納得する。

やがてガサガサに満足してしまうと、ペットボトルを自転車まえかこの前籠まへかごに載せて帰路についた。⁽⁵⁾

ゆつくりとペダルをこぎながら、ミライは晴れ晴れとした顔つきだ。

（川端裕人「てのひらの中の宇宙」による）

〔注〕タモ網——魚をすくうのに使う小さい網。

ザリガニ——ここではアメリカザリガニのこと。

たーちゃん——「ぼく」の母親。

逡巡——しゅんじゆんためらうこと。

〔問1〕⁽¹⁾ 目を輝かせるさまを見て、ぼくは少し反省した。とあるが、な

ぜか。その理由として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 息子がメダカを見つけ飛びはねて喜ぶ様子を見て、自分の生き物に対する興味がメダカには全く向いていなかったことに気づいたから。

イ 多忙を理由に息子に自然の中で生き物に接する機会を与えてこなかったため、息子が心ひかれるものさえ知らなかったことに気づいたから。

ウ 今に至るまで仕事でも家庭でも自分の興味を貫いてきたので、他人の気持ちを押し量ることができていなかったことに気づいたから。

エ 自分の幼い頃と比べて最近では自然環境が悪くなり生き物を捕まえられなかったため、川に行きたくても行けないもどかしさを感じていたから。

〔問2〕⁽²⁾ 大人げなく夢中になってしまったわけだけど、それだけのことはあった。とあるが、この表現から読み取れることの説明として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 「ぼく」は息子より川遊びに熱中したことを反省しつつも、父親が気まぐずい思いをしないように気遣ってくれる息子を見て喜んでいるということ。

イ 「ぼく」は息子と川遊びにのめり込んだことを後悔しつつも、だからこそ息子も自分の子どもの頃のように自然が好きだとわかったということ。

ウ 「ぼく」は息子を放っておいて川遊びをしたことを後ろめたく感じつつも、自分の子どもの時と変わらない川の様子を実感し安心したということ。

エ 「ぼく」は息子と川遊びに没頭したことを恥ずかしく感じつつも、だからこそ想像以上に色々な生き物がいる川だったことに気づけたということ。

〔問3〕⁽³⁾ ぼくは甘酸っぱい気分がさらにあふれ出してきて戸惑った。とあるが、このときの「ぼく」の様子を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

- ア 池で楽しそうに網を操る息子に、網をふるっては色々な生き物を捕まえていた自分の少年時代を重ねてうれしさを感じた上に、昔、カメを飼っていた頃のことを思い出してしまい、懐かしさがこみ上げてきて当惑している。
- イ ザリガニを欲しがる息子に、ザリガニの害を無理やり納得させてしまったのではないかとためらいを感じた上に、昔、生き物を捕まえてきては母親に叱られたことを思い出して、切ない気持ちになってきて閉口している。
- ウ 息子がカメを見たという言葉を聞き、少年時代にクサガメを飼っていたときのことを思い出して感傷的になっていた上に、昔、あこがれていたリクガメに不意に出会うことができて、興奮がおさえられずに困惑している。
- エ 生態系を保全しながら遊ぶことの大切さを息子に伝えることができた満足を感じた上に、昔、自分も自然の中で様々なことを学んでいたのだと思い出し、無理に動物を家で飼うことに疑問を感じて反省している。

〔問4〕⁽⁴⁾ またもドキッと心臓が強く脈打った。とあるが、このときの「ぼく」の状況の説明として最も適切なのは、次のうちではどれか。

- ア 偶然捕まえたカメがとても希少なものであることを知り胸が高鳴る中、また別のカメも見つけて、思い続けていると願いはかなうという体験を息子と共有でき喜んでいる。
- イ 何度も夢見ていたリクガメを、実際に見つけることができた喜びに浸るとともに、幼い息子が自分の飼いたがっていたカメを知っていたことに動揺しつつもうれしく感じている。
- ウ メダカやフナだけでなくカメもいる多様性の高い池の近くで、息子を育てることに喜びを感じ、大自然を満喫する息子のたくましい成長ぶりを目の当たりにして感嘆している。
- エ 自分が少年時代にあこがれていたリクガメを、こんな近所の池で実際に見つけて興奮していたところ、息子が網で別の小さなカメを捕まえていたのを目にして驚いている。

〔問5〕⁽⁵⁾ ゆっくりとペダルをこぎながら、ミライは晴れ晴れとした顔つきだ。とあるが、このときの「ミライ」の様子の説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア 自然を大いに味わう中で、父親と探していた希少生物と出会えたことに興奮し、達成感でさわやかな気持ちになっている。
- イ 父親と川遊びを楽しみ興奮していたが、クサガメを持ち帰れないことに自分なりに納得し、落ち着いた気持ちになっている。
- ウ 川遊びで多くの生き物との出会いや父親とのやりとりを楽しみ、その余韻を味わいながら、すがすがしい気持ちになっている。
- エ ガサガサという新たな遊びの楽しさに満足し、次の休みに父親が新たな遊びを教えてくれるのを待ち望む気持ちになっている。

〔問6〕 次は、A～Dの四人の生徒が、本文の表現の特徴や工夫について話し合う授業の一場面である。あとの間にそれぞれ答えよ。

- A 「すーっと」「つーつーっと」「ぬーっと」など面白い擬態語が多く使われています。
- B 辞書をひくと「すうっと」「つうっと」「ぬうっと」となっています。少し変化させて使っているのが気になります。
- C 「ー」は長音つて言うんだって。
- D そういえば台詞にも「ー」がたくさん使われています。「うおーっ。」とか、「もつとりたいぞー。」とか。これらはミライくんの子どもっぽいかわいらしい言葉遣いを表現していると思います。
- C 話し言葉の使い方もとってもかわいいよね。なんとかだぞ、とか。

- B お父さんとのやりとりが目には浮かぶようです。
- A 二人のやりとりのように、この文章全体も「1」雰囲気を感じられるのは、もしかしたらそういう一つ一つの言葉遣いによる影響かもしれませんね。

B そうそう。「ぬうっと」は辞書を調べてみると、のろい動作で、不意に目の前に現れる様子を表現していますが、時に、やや「2」印象もあると書かれています。でも、「ぬーっと」とすることで、その印象が「3」印象に変わっているように思います。

A 表現や一つ一つの言葉を変化させることによって、文章全体の雰囲気を変化することですね。その状況に合った言葉を選ぶことの大切さを感じられて面白いです。

D 私は、実は「4」という隠喩表現がどういうことを言っているのか、気になっていたので、みんなの話し合いを聞いていて、隠喩表現を使うことによって、ゆったりした雰囲気を印象的に表現する効果につながっているのかもしれないと思いました。

〔i〕 空欄「1」「2」「3」に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものはどれか、次の選択肢A～Cから選べ。

- | | | | | | | |
|---|---|------|---|-------|---|--------|
| ア | 1 | 気楽な | 2 | ぞんざいな | 3 | ほがらかな |
| イ | 1 | 穏やかな | 2 | 不気味な | 3 | 親しみやすい |
| ウ | 1 | 気さくな | 2 | ぶしつけな | 3 | 人なつこい |
| エ | 1 | 陽気な | 2 | 無邪気な | 3 | しおらしい |
| オ | 1 | 軽妙な | 2 | すげない | 3 | あどけない |

〔ii〕 空欄「4」に当てはまる最も適切な表現を、本文中から一文でそのまま抜き出せ。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

対話とは、あるテーマについて自分の考えを提示しあい、相互に検討し、吟味するという過程である。ひとつのテーマや問いに対して、それぞれが意見を出し合うときに、すぐに明らかになるのは意見の多様性である。子どもの哲学をはじめで行った子どもの感想としてもっとも多いのが、「いろいろな意見があるので驚いた」「普段からよく知っている友だちが、あんなことを考えているとは思わなかった」というものである。比較的文化的・地域的な背景が均一である小学校で行っても、こうした感想が得られる。さらにさまざまな背景を持った人々の意見ならば、異なっているのが当たり前である。

哲学対話の特徴は、自分の意見が皆からの検討に付される点である。通常の話し合いでは、人はどうしても持説に固執してしまう。とくに自分のさまざまな行動の前提となっているような信念や、自分が常識と思っているような信念についてならば、なおさらである。普段はこのような自分の深いところにある考えを簡単には披露しないし、かりに披露してもそれを検討し合うことはしない。大人の方が、子どもより自分の意見に固執しがちであるし、人の意見を聞こうともしないことがある。

しかし哲学対話ではあえて持説を検討し合うことを目的としている。ダイアベートが持説を擁護して、相手を説得することに目的があるとすれば、哲学対話で重要とされるのは、相手の話を傾聴して、そこで得られた視点や立場から自分自身の考えを検討し、必要とあればそれを変える姿勢でいることである。⁽¹⁾これが哲学対話と他の対話との違いである。哲学とは、自分の前提や習慣、信念を自己吟味し、場合によっては自己変更する試みだからである。

このような自己吟味の姿勢を保つには、新しい考えを作り出すという

気持ちで対話に参加することが大切である。しかしこの気持ちを対話の最初から持つことは難しいかもしれない。皆で対話をするときには、テーマや問いが設定される。そして、誰かがそれについての意見を言う。他の人がそれとは異なる意見を言う。そしてそれぞれの意見に対して、質問が出され、対立する意見との比較がなされ、批判的な吟味がなされる。ひとつの意見は、さまざまな角度と視点から、多様な立場から検討され、広い文脈と背景の中に置き直される。思考は、ある前提に立って議論を進めようとする。対話は議論の前提からさらに引き下がろうとする。思考は進行的で、対話は遡行的である。

議論には、ズームインとズームアウトという過程があると言える。ズームインとは、あるテーマや問いを、さらに詳細にしばしば具体的に論じていく過程である。ズームアウトとは、あるテーマや問いを広い文脈や枠組みに置いて、鳥瞰図^{*ちやうかんず}を得ようとする過程である。ズームインから得られる議論は、問題解決的であり、専門的で技術的になっていく。他方、ズームアウトから得られる議論は、前提を問い直し、視野を広げて全体的になっていく。哲学の議論は後者を重視する。それはできる限り広い範囲の多様な視点から、問題を考えようとする態度である。対話に参加したものは、自分の意見が自覚のないままに狭い前提や限られた文脈から出ていることを知り、他の考え方の可能性もあることを理解する。⁽²⁾こうして、哲学対話によって、参加者は自己束縛を解いて自由になる。それは他者との出会いにより、自分が自分に距離をとっていく過程である。

こうした対話では、問いやテーマに対して解決が出されるというよりは、その問いやテーマ、出される意見に対して、他の問いやテーマ、意見が関連づけられる。子どもの哲学の例を使ってみよう。「偉いってどういうこと」という質問が子どもから出される。すると、具体例が出されながら、「偉い」という言葉の定義が試みられる。「社会的地位が高い」

「評価に値する」、「努力した」、「すごい」などといった複数の概念と比較対照がなされる。具体的な人物名や振る舞いの事例が出され、その人やその行動が「偉い」という形容に値するかどうかが論じられる。これらの事例は単なる寄せ集めなのか、それとも「偉い」には共通性があるかどうかを検討される。褒め言葉としては、自分よりも目上や年上の人には「偉いね」とは言わない、などといった、言葉が使用される文脈や場面も論じられる。さらに、ある人から、ある地方では、「えらいやつちゃん」とか「えらいことしてくれたな」といったように、批判あるいは悲嘆の表現として「えらい」が使われることがあると指摘される。

⁽³⁾ これほど多様な定義の候補が出されると、「偉い」についてひとつの決定的な定義に至ることは難しいだろう。さらに「地位が高いとはどういうことか」「努力したと認められるのはどういう時か」「すごいとは何か」とか、「なぜ人は人を褒めるのか」「なぜ人は評価するのか」とか、「そもそも、なぜ偉いかどうか気になるのか」といったメタレベルに問いは移行していく。ひとつの問いは無数の線によって他の問いとつながっており、最初の問いに答えるには、すべての問いに答えなければならない。

では、このような哲学対話では何が行われているのであろうか。それは意味づけである。「偉い」という概念は、対話によって、他のさまざまな概念との関連が示され、それが用いられる文脈や場面が明らかに becoming。関連した概念もさらに他の概念との関連が示されていく。こうした関連づけは、意味づけと呼んでよい。ひとつのテーマや問いが、他のテーマや問いのネットワークの中に、水平的に階層的に、時間的に空間的に、位置づけられていく。これがズームアウトする議論の成果である。

対話では、自分の意見も全体の中に位置づけられ、意味づけられている。単に私の意見の真偽や正否が検討されるだけではない。他の意見との間でどのようなポジションになるのか、どのような前提に立ち、どの

ような帰結をもたらすものなのかが徐々に明らかになっていく。

人は自分の意見にしばしば固執している。自分の意見が批判されることは、自分が否定されているかのように感じるかもしれない。それゆえに、人は、自分が傷つき、他人を傷つけることを恐れて、議論を避けようとする。議論することは、他者と戦い争うことであるかのように思っている。主張が正しいかどうかよりも、ときに妥協し、ときに付和雷同し、ときに多数派について議論を終了させようとする。声が大きいくだけで正しくない意見でも追従する。

しかし対話では、さまざまな意見が多角的に検討されることにより、あらゆる意見が相対化される。ここで相対化されるとは、意味づけられるのと同じことである。そうして私の意見は、疑問や反論にさらされながらも、一定の位置づけ、すなわち意味づけを得る。多くの人が対話に参加すればするほど、全体が理解されていく。それは、自分の意見が位置づけられることであると同時に、自分自身がグループのなかに存在する意味を見いだすことでもある。参加者のグループが分かち合うのは、この意味の全体像である。哲学対話では、抽象概念を振り回すのではなく、参加していくことによって全体の理解が生じてくる。⁽⁴⁾ それゆえに、対話には、参加者を真にグループに包括していく働きがある。

哲学対話で行われるのは、問題解決ではなく、問題の意味づけである。意味づけとは、価値づけでもありうる。価値とは優先順位のことである。あるテーマが他のテーマとの関連で優先されるべきであると判断されれば、そのテーマの価値が理解されたのである。

では、対話の終着点、あるいは目標とは何であろうか。意味の全体像を得ることだろうか。そう言えるが、より多様な観点や視点から発言がなされることによって、文脈や枠組みがさらに広い範囲へと広げられることによって、あるいはさらにメタレベルの議論がされることによって、意味の全体像はむしろ広がっていき、最終的な全体像など得られそうに

ない。であるならば、対話の目標をどこに置けばいいのだろうか。

それは、新しさの発現である。新しさとは新しい組み合わせのことである。あるものは、これまでとは異なった関連性や文脈、枠組みの中に入ることによって新しさを得る。ある問いが新しい枠組みに置かれて、これまでとは別の展開を見せること、あるテーマが異なった人により異なった文脈により論じられること、自分の考えが意外な関連性のもとに置かれてこれまでとは異なった価値づけがなされること、これらが新しさの発現である。グループでの対話が新しい意味と目的を創発して、個人にとってもそれまでとは異なった考えを持てる場所となる。各人が自分自身を更新して、それまでの自分から自由になることができるならば、その対話は成功したのである。哲学対話には、あらかじめ決められた到着点も方向性もない。⁽⁵⁾ 唯一重要であるのは、新しさである。新しい存在を生み出すことである。

対話は、新しさを生み出すことが目的であるかぎり、その過程には終わりがない。それは更新することそのことに意義がある、と言い換えてもよい。ジョン・デューイは、教育の目的とは、成長そのものであると主張した。教育には到達地としての目的などない。固定された目的などは存在せず、人々の間で目的が一致するわけでもない。「どこへ向かっての成長か」という問いそのものが、成長の概念に反するのである。というのは、成長とは運動だからである。成長とは、さまざまな人間との接触により、他者との交流に身を置き、いっそう豊かな経験、さらに新しい経験をしていくことである。成長の過程が、次の段階を自生的に生み出すのである。⁽⁶⁾ 対話の目的は、対話の過程の外から与えられてはならない。いや、対話には特定の目的地があつてはならない。もし対話の目的があるとすれば、新しさを追求すること以外ではない。それは、地上に新しい生き物を生み出す共同行為なのである。

(河野哲也「人は語り続けるとき、考えていない」による)

〔注〕子どもの哲学——「子どもとともにする哲学的探求」という教育

活動のこと。

鳥瞰図——高い所から見下ろしたように描いた風景図。

メタレベル——高次の段階。

ジョン・デューイ——アメリカの哲学者。

〔問1〕⁽¹⁾ これが哲学対話と他の対話との違いである。とあるが、どのような違いか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 他の対話では、自己を変革するために、相手の話を取り入れようとすることを心掛けるのに対し、哲学対話では、持説を大切にし常識を基準とすることで、自分の主張を確固たるものとするという違い。

イ 他の対話では、持説を擁護して、相手を納得させることを意図しているのに対し、哲学対話では、対話を進展させるために、相手の話を熱心に聞いて、相手の意見に迎合するという違い。

ウ 他の対話では、人は信念や常識にとらわれ、自分の深い考えを捉え直すことはないのに対し、哲学対話では、相手の話を熱心に聞くことで自分の信念を見直し、時に自己変革をすることもあるという違い。

エ 他の対話では、主題や問いについて、前提に立って議論を進めていくのに対して、哲学対話では、問題解決のために議論を行い、それが専門的で技術的になっていくという傾向があるという違い。

〔問2〕⁽²⁾ こうして、哲学対話によって、参加者は自己束縛を解いて自由になる。とあるが、「自己束縛を解いて自由になる」とはどのようなことか。

これを次の〔 〕のように説明するとき、〔 1 〕と

〔 2 〕に当てはまる最も適切な表現を、本文中から〔 1 〕は十五字、〔 2 〕は十六字で探し、そのまま抜き出して書け。

哲学対話により、〔 1 〕を持つことで、無意識に自分の思考をせめていたことに気づき、〔 2 〕ようになること。

〔問3〕⁽³⁾ これほど多様な定義の候補が出されると、「偉い」についてひとつの決定的な定義に至ることは難しいだろう。とあるが、それはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 言葉というものは、様々な場面や状況において幅広く用いられるものであり、概念の内容を明確に限定することが不可能だから。

イ 言葉というものは、狭く限られた範囲の中でしか伝わらないものであり、複数の概念を比較して検討する必要はないから。

ウ 言葉というものは、多くの意味の中から共通性を見出すことが難しいものであり、それを議論によって作り上げていくものだから。

エ 言葉というものは、奥深いものであり、人生の経験が少ない子どもに言葉の意味を決めさせることは簡単ではないから。

〔問4〕⁽⁴⁾ それゆえに、対話には、参加者を真にグループに包括していく働きがある。とあるが、その「働き」はどのようなことをもたらすのか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 多くの人が対話に参加し、同じ考えを持つ人が自然に集団を形成することで、互いの理解が深まり、強い関係で結ばれていくようになること。
イ 皆の意見が相対化されると同時に、それらの位置づけが理解され、互いが表面的ではなく、意見を共有した上でつながっていくようになること。
ウ 対話の細部に焦点を当て、特定分野を深く掘り下げることで、参加者同士の連携が強まり、互いの存在の大切さに気づくようになること。
エ 参加者の意見をまとめるために自由に批判し合い議論を深めて、他者の意見を想像しながら対話を重ねる重要性を意識すること。

〔問5〕⁽⁵⁾ 唯一重要であるのは、新しさである。とあるが、筆者の主張の意図を踏まえて、これまであなたが体験した「新しさ」の例を二〇〇字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄や、や・や「などもそれぞれ字数に数えよ。

〔問6〕⁽⁶⁾ 対話の目的は、対話の過程の外から与えられてはならない。とあるが、それはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

- ア 相手の話を聴き、違う立場の意見も十分に尊重しつつ、自分自身の考えをより強く持たなければならぬということだから。
- イ 皆で話し合う過程が、自然に新しいものを生み出し、その中から、また次の新しいものが生み出されていくということだから。
- ウ 話し合いを十分に重ね、皆で新しいものを生み出していくために、様々な課題を解決しなくてはならないものだから。
- エ 対立する皆の意見を取りあげ、新たな視点から検討することにより、参加者で結論を生み出していくものだから。

〔問7〕 本文の論の展開について説明したものとして、次のうちから最も適切なものを選べ。

- ア まず、テーマや問いの設定の難しさについて考察している。次に、哲学対話に移行するために必要な条件について指摘し、最後に対話が生み出す新しさについて検証している。
- イ まず、哲学対話における議論の必要性について考察している。次に、自分の信念を守ることの重要性を指摘し、最後に自分自身を更新していく方法について検証している。
- ウ まず、哲学対話と他の対話について考察している。次に、思考と対話を比較してから哲学対話における意味づけについて指摘し、最後に対話に終着点はあるかを検証している。
- エ まず、年代による意見の出し方の違いについて考察している。次に、哲学対話を行うことで新たな問いが生まれることを指摘し、最後に問いを解決すべき方法を検証している。

次の平安末期の歌人藤原俊成について述べた文章を読んで、あと各問に答えよ。「」内は、本文に引用されている古文の現代語訳を補ったものである。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

五十歳を越え、俊成は歌合の判者を依頼されるようになり、そのような機会に同時代の和歌を批評し、和歌のあるべき姿を探究していった。俊成が最初に歌合判者を務めたのがいつかははっきりとはしないが、現在のところでは長寛二年八月十五夜に俊成が催した「白川歌合」と呼ばれる散佚歌合ではなかったかとされる（なお、『平安朝歌合大成 増補新訂』では「俊成歌林苑歌合」と呼ぶ）。

その二年後、藤原清輔の異母弟である中宮亮重家が主催した『中宮亮重家朝臣家歌合』の場合は、端作に「永万二年」と小書きし、「判者前左京大夫顕広朝臣」と記す証本が伝わっている。永万二年正月十二日に俊成は、長男成家の侍従への申任のため左京大夫を辞しており、刑部卿重家が中宮亮を兼ねたのは同年四月六日のことである。そして、八月二十七日に仁安と改元された。それゆえにこの歌合は永万二年の四月初めから八月末までの間に催行されたこととなる。歌題は「花」「郭公」「月」「雪」「恋」の五題、歌人は権中納言藤原実国・女房小侍従・俊成ら二十八人で、計七十番という規模のものであった。

俊成は作者として参加したのではなく、おそらく歌合が催された後に結番（左方と右方に分けられた歌人たちの歌を一首ずつ、左右に番える〈組み合わせる〉こと）された本文を送られ、判者を依頼されたので加判し、判詞を書き付けたと推定される。この頃には俊成と清輔が歌の上でライバルの関係にあることは誰の目にも明らかであった。それなのに重家が、義兄弟の顕昭や同母弟の季経も加わるこの歌合の判者を、なぜ異母兄の清輔ではなく、俊成に依頼したのかは全くわからない。四年前

の「このもかのもの」論争では俊成の意見を支持するような発言をしているし、重家にとって、清輔は時に煙たい兄であったのかもしれないが、何とも言えない。俊成としては清輔を強く意識しつつ、気を入れて加判したに違いない。

(1) この判詞は、現在の我々が接することのできる最初の俊成のまとまった歌評である。そして、彼の歌の読みがきわめて周到で、古代から近い時代までのおびただしい数の和歌に精通していたことを想像させるに十分なものである。俊成歌論で重要な「幽玄」や「余情」といった用語も見られる。たとえば、「花」の二番についての俊成の判詞を見てみよう。まず番えられた歌は次のとおりである。

左

* 別当隆季

うち寄する五百重の波の白木綿は花散る里の遠目なりけり

（水辺に寄せる幾重にも重なった白木綿のような白波かと思えたのは、じつは遠目に見た、桜の花が散っている里の風景だったよ）「五百重の波」は『万葉集』の歌句にもとづく。「白木綿」は神事などに用いられる楮の皮の繊維（）

右

* 三河

散り散らずおぼつかなきに花ざかり木のもとをこそすみかにはせめ
（桜の花がもう散ったかまだ散らないか気がかりなので、いつそのこと花盛りの木の下を住みかとしよう）

俊成はまず左の歌について、「風体は幽玄、詞義は凡俗にあらず」（歌としての姿は奥深く感じられて趣があり、歌の句が意味することも平凡ではない）と評価しつつ、海や川などの語もなく遠望する里の落花を波にたとえ、森や社などを詠み入れずに白木綿に見立てることには無理がある。遠望する風景ならば、花が散っている有様をとくに「五百重の白木綿」かと錯覚することもないのではないかと批判した。

一方、右の歌については、伊勢の「散り散らず聞かまほしきを古里の

花見て帰る人も逢はなん」「もう散ってしまったか、それともまだ散らずに残っているか、聞いてみたいのだが、旧都の花を見て帰ってくる人があれば、逢ってほしいものだ。」（『拾遺和歌集』春・四九）と、おそらく花山院の「木のもとをすみかとすればおのづから花見る人となりぬべきかな」「桜の木の下を住処」と、花を見る人ということに、おのずからなってしまういそうだなあ。」（『詞花和歌集』雑上・二七六）を念頭に置いて、「古言どもをとかく引き寄せられたる」（古歌の表現をあれこれと取り入れておられる）と、その技巧は認めつつも、それらの古歌に比べて「花を思ふ心」が深くなく、結句（第五句）も「すみかにはせめ」という、自身の意志をはっきりと表明した点を「余情足らずやあらむ」（言外にただよう情趣が足りないようだ）と述べ、左の「なほ波の白木綿は、歌のさま、たけまさりてや」（やはり「波の白木綿」という句を含む左の歌は格調の高さが右の歌よりも勝っているであろうか）と⁽³⁾結論づけた。「たけ」（格調の高さ）の有無も歌評でしばしば論じられる美的要素であった。

古歌の趣向や表現を取り入れながら自身の歌を創出することの可否や難しさは、多くの歌人が考えさせられる問題であったに違いない。

俊成はこの歌合で、重家が「花」の五番（左）で詠んだ「小初瀬の花のさかりを見わたせば霞にまがふ峰の白雲」「初瀬山の花の盛りを遠く望むと、霞にまがれて峰の桜は白雲と見分けがつかないよ。」（花五番左）という歌について、『後撰和歌集』の読人しらず（雑三・一二四二）の歌を花の歌に変えたのであろうと指摘した後、やや時代が下ると本歌取りと呼ばれる、有名な古歌（本歌）から一、二句を自分の歌に取り入れるという技法について、自分の考えを述べている。当時はまだ歌人の間に、この技法についての共通の認識は存在しなかったのであろう。すなわち俊成は、古い名歌を巧みに取ることはよいという「古き人」の考えを尊重しつつも、それは⁽⁴⁾慎重になされねばならないと考える一方で、

『白氏文集』のような漢詩の風韻や『万葉集』のような古代的な雰囲気を取り込むことには、積極的な姿勢を示そうとしていたと思われる。そこには師として仰いだ基俊の影響も考えられるが、また、清輔などに代表される六条家の歌学を意識した結果であったかもしれない。

（久保田淳「藤原俊成」による）

〔注〕歌合——左右に分かれて出題された題などに応じた和歌を詠み、優劣を競う遊び。

長寛——日本の元号。

俊恵——平安時代後期の歌人。

散佚——文献などの所在がわからなくなること。

藤原清輔・中宮亮重家——平安時代後期の歌人。

朝臣——敬称。

端作——冒頭に記された言葉。

永万——日本の元号。

前左京大夫頭広朝臣——俊成のこと。

侍従——役職名。

申任——子弟を官職につけるため、親が職を辞すること。

刑部卿——役職名。

仁安——日本の元号。

権中納言藤原実国・女房小侍従——平安時代後期の歌人。

加判——左右の歌に判定を書き付けること。

顕昭・季経——平安時代後期、鎌倉時代前期にかけての歌人。

「このもかのも」論争——俊成と清輔との間の歌に関する論争。

別当隆季——平安時代後期の歌人。

格——植物の名。和紙の原料。

三河・伊勢——平安時代後期、鎌倉時代前期にかけての女流歌人。

『拾遺和歌集』——平安時代の和歌集。

花山院——第六代天皇。花山天皇のこと。

『詞花和歌集』・『後撰和歌集』——平安時代の和歌集。

『後撰和歌集』の読人しらず（雑三・一二四二）の歌——

「菅原や伏見の暮に見わたせば霞にまがふ小初瀬の山」という歌のこと。「菅原の伏見の里、ここで、「臥し見」という地名にふさわしく、暮れ方にずっと見わたすと、霞にまがうように初瀬の山が見えることであるよ。」

『白氏文集』——中国唐代中期、白居易の詩集。

基俊——平安時代後期の歌人。

六条家の歌学——六条家と呼ばれる家柄の歌に関する学問。

〔問1〕⁽¹⁾ この判詞は、現在の我々が接することのできる最初の俊成のまと

まった歌評である。とあるが、俊成の判詞にはどのような特徴があるか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 当時流行した歌の詠み方を認めず、旧来通りの言葉の使い方や技法を使うよう勧めている。

イ 同時代の歌人たちの歌は技術が未熟であるということを指摘し、技巧面の批評が中心になっている。

ウ 古今の多様な和歌を知りつくした知識をもとに、歌論の理念や和歌の技法について述べられている。

エ 自分の師匠や他の流派への対抗意識を燃やし、間接的に批判する言葉を用いて述べられている。

〔問2〕⁽²⁾ 幽玄とあるが、ここでの「幽玄」とはどのようなことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 容易にはうかがい知れない、しみじみとした味わいを感じさせること。
イ 自然ににじみ出るような、知的でみやびやかな風情を感じさせること。
ウ すみずみまで行き届いた、丁寧な解釈の面白さを感じさせること。
エ 何一つとして変わらないものはない、世のほかなさを感じさせること。

〔問3〕⁽³⁾ 結論づけた。とあるが、どのように結論づけたのか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 右の歌は、古歌の表現や古代的な雰囲気を取り込んでいるが、高く評価できる点は見当たらず、左の歌は、趣のある言葉を使いながら見立ての技法も非常に優れていて申し分ないと判断した。

イ 右の歌は、古歌の表現を取り入れる技法については評価できるが、はっきりと意志を述べすぎており、左の歌は、見立ての技法には無理があるものの、格調の高い表現を用いていると判断した。

ウ 右の歌は、言葉の情趣に富んでいて格調が高く、見立ての技法も優れているが、左の歌は、見立ての技法が稚拙であるものの、見立てられた風景には素朴に感じられた良さがあると判断した。

エ 右の歌は、古歌を巧みに取り入れている点では評価できるが、格調の高さに難点があり、左の歌は、古歌を取り入れることができていないが、古代的な雰囲気は感じられると判断した。

〔問4〕⁽⁴⁾ 慎重になされねばならないとあるが、それはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

- ア 古歌の表現を取り入れ、その趣を生かしつつ、古歌に勝る情趣を感じさせることは非常に難しいことであり、安易に行うべきではないから。
- イ 古歌の表現を取り入れる時には、優れた歌を選ぶことが大切であるが、自分の思いや描こうとする世界と重なるものを探すのは容易ではないから。
- ウ 古歌の表現や趣を取り入れることで、もとの歌以上の魅力を引き出し、歌を作り出すことは、古歌の評判にも関わることで、気遣いが必要だから。
- エ 古代的な雰囲気を持つ古歌の表現を積極的に取り入れていきたいが、古代特有の歌風に縛られることになり、自分の歌に大きな影響を及ぼすから。

〔問5〕 本文の内容に合致しないものとして最も適切なのはどれか、次の選択肢ア～オから選べ。

- ア 俊成が最初に判者を務めたときとされる「白川歌合」の詳細は確認できないが、重家が主催した歌合での判詞は現存している。
- イ 俊成と清輔は和歌の世界で対立する関係であったが、重家は歌合の判者を親族である清輔や顕昭ではなく、俊成に依頼した。
- ウ 和歌の中で、あるものを別のものになぞらえた表現も、関連する言語が乏しいと、無理のある表現になると俊成は考えている。
- エ 俊成は、『白氏文集』や『万葉集』などの詩句を、意欲的に取り入れるのは良いことだと考えている。
- オ 俊成は師である基俊の教えに左右されず、古歌の趣向や表現を取り入れる技法を尊重し、その確立に努めた。

6

国

国

五

日